



▲宮川修典さん。両親・妻とともに市内の畑を耕作。東京都農業祭共進会で父が「農林水産大臣賞」を受賞したナスをはじめ、タマネギや米などを作っている。

※認定農業者…自らの創意工夫に基づいて経営の改善を進めようとする「農業経営改善計画」を市が認定した農業者

東京都で3番目に小さい市である羽村市は、住宅街だけでなく山や川などの自然、田んぼや畑などもギュッと詰まったコンパクトなまち。今回は、市の「認定農業者※」である若手の2人、宮川修典さんと安達久登さんに、都市農業の魅力や価値などについて伺いました。

■就農決断の裏に家族あり

——そもそも農業との関わりはどのように始まったのですか

安達さん 彼女（現在は妻）が農家の娘だったんです。当時はほかの仕事をしていましたが、1年考えて「これまでと全然違う新しいことに挑戦してみるのもいいかもしれない」と思い、妻の家族に飛び込みました。ちよつと不安もありましたが、温かく受け入れてもらえました。

宮川さん 父が祖父の跡を継いで就農したのが40歳代で、自分は小5くらいから手伝っていました。最初は草取りをさせられましたが、子どもだからすぐに飽きてしまうんですよ。そこで父は、トラクターを運転させてくれたんです。私有地だし、その方が少しでも役に立つから（笑）。近くのグラウンドでは同級生が野球をやっていたなあ。中2の時に「お前、農業をやるか」と決断を迫られました（笑）。まあ、いずれは自分も携わると思っていたし、断る理由もなかったんで、結婚を機に、就農しました。

小さなまちの 豊かな実りを届けたい 〜都市農業を受け継ぐ〜

問合せ 産業振興課農政係 ☎661

——実際に農業に取り組み始めての感想は
安達さん まずは草取りから、ということで、はじめの頃はひたすら草を取りました。最初の夏はとても暑くて、最高気温が青梅で40度を超えたことを覚えています。半日でヘトヘト。でも、自然の中で土に触れながらの作業が楽しいことに気が付きました。

宮川さん 子ども心に、例えば田んぼでは風が気持ちいいな、と思うたりしていました。農業を始めると自然が好きになりました。稲穂が風になびいて波のように見えるときなんか、自然の癒しみみたいなものを感じますね。

——農家であることの良さを今どう感じていますか

宮川さん 個人的には、定休日がなかなか取れない難点はあるけれど、子どもが小さい時に、近くにいることができました。昼に家に帰ればいるし、畑に遊びに来ることもあるし。親が働いている姿を見ながら子どもが育つっていうのはいいことだと思うんですね。

安達さん 新鮮な野菜に困らないところ（笑）。もちろん、肉や魚は買わなくてはなりませんが、あとは一緒に働いているので、妻の家族とのコミュニケーションがとりやすいことかな。

■農家の毎日は自然の一部

——畑では主に何を作っていますか

▶安達久登さん 5年前に市内農家の長女と結婚し農業に携わることに。昨年11月、キュウリで東京都農業祭共進会の「明治神宮賞」を受賞した。

——農業の先輩でもある親御さんと一緒に働いてどのように感じますか

宮川さん 父はとても几帳面で「いつ植えたらいつどうなるか」などのデータを詳しく取っています。それが活用できるので自分もとても助かります。頼りになります。

■親世代と自分たち

——最近の畑の様子はどつですか
安達さん 暖かい日が長く続くようになって野菜の生育が早まっていて、出荷のタイミングを計るのが難しくなりました。

宮川さん 天候の影響をもろに受けますからね。今年は稲の刈取りがうまくいってホツとしました。この頃は天候が極端で、夏は暑すぎるし、雨が降れば多すぎるし、降らなければ降らなすぎる。暖かい時期が長くなって育てやすくなった野菜もあるけれど、野菜が病気になるやすくなったのが困りますね。

宮川さん ナス、ピーマン、キュウリ、トウモロコシなどの夏野菜、冬は芋類や白菜が中心です。タマネギは学校給食センターに卸しています。

安達さん 夏野菜全般と、冬はブロッコリー、キャベツ、イチゴなどを作っています。義父はイチゴ、トマトが得意ですね。

宮川さん 安達君のところは大根とてもきれいだしキュウリもまっすぐ。形の整った野菜は、微妙な差なんです。整っていないものよりおいしいと思います。

——最近の畑の様子はどつですか

安達さん 暖かい日が長く続くようになって野菜の生育が早まっていて、出荷のタイミングを計るのが難しくなりました。

宮川さん 天候の影響をもろに受けますからね。今年は稲の刈取りがうまくいってホツとしました。この頃は天候が極端で、夏は暑すぎるし、雨が降れば多すぎるし、降らなければ降らなすぎる。暖かい時期が長くなって育てやすくなった野菜もあるけれど、野菜が病気になるやすくなったのが困りますね。